

The Tokyo Foundation ISSUES SERIES

東ティモール問題 ～その過去と未来、そして世界と日本～
貴島 正道
(東京東ティモール協会代表)

まえがき

この議事録は、本財団がシンクタンク事業の一環として実施している「アフタヌーン・セミナー」の第18回会合「東ティモール問題 ～その過去と未来、そして世界と日本～」の速記録である。

今回の会合では、講師を務める東京東ティモール協会代表 貴島正道氏より、上記のテーマについての報告が行われ、その後、報告内容に基づき活発な議論が行われた。

本セミナーは、多彩な参加者が、国内外の様々なテーマについて、オープンな形で議論することを目的として開催するものである。なお、本セミナーは、日本財団の補助を受けて、実施している。

この議事録は、本セミナーの成果を関係各位に報告するとともに、より多くの方々にもその内容を共有していただけるよう作成されたものである。

1999年10月

貴島 正道 氏 略歴 (Masamichi Kijima)

1941年 九州帝大法学部卒業。

1942～46年 陸軍主計将校として戦地に赴く。

1946～70年 社会党本部にて中央執行委員等を歴任。

1972年 (社)現代総合研究集団設立。

現在、東京東ティモール協会代表、「菅 直人を応援する会」会長、および
(社)現代総合研究集団理事。

目次

第1部 発言内容

1. 報告要約 1
2. 講師報告 2
3. 質疑応答 13

1. 報告要約 (Summary)

「東ティモール問題 ～その過去と未来、そして世界と日本～」

民族独立運動は、20 世紀半ば過ぎから世界各地で起こっている。東ティモールもその一つである。約半世紀のポルトガル統治から、様々な混乱を乗り越え、住民投票によって独立国家となった東ティモールの歴史を振り返る。また、民族独立運動に対する今後の日本の対応についても考える。

“The East Timor Problem—Past & Future: Implications for Japan’s Role in the World”

The second half of the 20th century witnessed an upsurge of independence movements by ethnic populations--a salient example of which has been seen in East Timor. This paper looks back over the tumultuous half century of East Timor history since the cessation of Portuguese suzerainty, and examines the course of events, both problems and responses, leading up to the popular referendum that recently established East Timor as an autonomous state. Using the East Timor experience as food for thought, it also explores the role that Japan might assume in responding to ethnic separatist movements that occur in the future.

司会 皆様、本日はお忙しい中、また、あいにくの雨模様にもかかわらず、第 18 回アフタヌーン・セミナーにお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。本日は、東京東ティモール協会代表でいらっしゃいます、貴島正道さんを講師にお迎えいたしまして、「東ティモール問題 ～その過去と未来、そして世界と日本～」というテーマでお話しいただきます。

貴島さんは、戦後これまで半世紀以上にわたりまして、東ティモールの独立問題に携わっていらっしゃいます。本日は、まず貴島さんより、40 分から 50 分ほどお話をいただきました後、40 分ほど質疑応答の時間をとらせていただきたいと思います。3 時ごろの終了を予定いたしております。その後、別室にてコーヒーの御用意をさせていただきますので、お時間のある方は、ぜひそちらにも御参加いただきまして、貴島さんと御歓談いただければと思っております。それでは、貴島さんよろしくお願いたします。

2. 講師報告

貴島 貴島です。初めてでない人もいらっしゃいますが、初めまして。東ティモール協会代表になったんですが、68 年のフランスの革命のときの有名な言葉に「何とかの代表というのは大体いんちきだ」というのがあります。一人は一人しか代表ができない。だから、僕の場合も大体、代表というのは名前だけです。ただ長くやっているということは間違いない。初めてからもう 20 年近くになると思います。

こういうところで話をするとき、どれだけその問題について共通の理解があるかどうか、なかなか難しいんです。余計なことをしゃべって「そんなこと知っているよ」と言われるのか、「もっとあそこを詳しく」とか、非常に難しいんですが、適当にやってみます。

東ティモール問題、きょうは、新聞記者の方もおられると思うんですが、国家として、住民投票で国家が独立したというのは、世界史で初めてじゃないですか。地方自治体とかではありますけど、一つの国家が住民投票で独立するというのはないんじゃないかと思えます。僕の知識が薄いかもしれませんが、多分そうだと思います。それぐらいすごいことだと思うんですが、新聞はそういうところをあまり取り上げないみたいです。

僕は、20 世紀というのはすべての植民地が独立する世紀だというふうに考えていま

す。20 世紀というのは、非常に簡単に言えば、パックスアメリカナとかいろいろありますが、そうではなくて、社会的にみると、20 世紀というのは 3 つの特徴があったと思います。

一つは、民主主義が一般大衆化したというか、すべての人が投票権を持てるんです。日本でも女性の方も戦後投票権を持てるようになった。民主主義が大衆化したということが一つ。

それから、物質文明が最高に達した。もうこれ以上いらないんじゃないかと、私は思っています。皆さんはそうじゃないと思ってるかもしれませんが、これ以上の物質的な豊かさとか、これ以上のスピード、これ以上の便利さ、全部いらないと僕は思っています。それが 2 番目の特徴です。

3 つ目が、すべての植民地が独立する。これがやっぱり 20 世紀であるんです。その最後に残ったのが東ティモールです。まだ小さなところでちょっとありますけどね。でも、もうほとんどないんです。植民地が独立した。その世紀なんです。だから僕はよく、東ティモールが独立しなければ、20 世紀は終わらないと言って、よく演説していたんですが、そういう問題だと思います。

どうしてこうなったかと言いますと、東ティモールというのは 450 年植民地なんです。自分の祖国を持ったことがない。あそこはポルトガルの植民地だったわけです。

場所から言いましょう。場所はわかりますよね。ジャワから、真珠の首飾りとよく言われる小スンダ列島というのがありまして、その一番東の端にティモール島があります。ちょうどニューギニアの南、オーストラリアの北というところ。ちょうど真ん中辺にあるんです。

そこは、初めポルトガルが植民地にしたんですが、途中でオランダが入ってきて、両方で分けて東はポルトガル領、西はオランダ領ということになったんです。それが 16 世紀です。それからずっとポルトガル領で、祖国を持たないままに來たわけです。1945 年に第二次大戦が終わりますが、その間に日本も 3 年間侵略しています。

後で話しますが、戦争中、僕が一番長くいたのは東ティモールなんですよ。僕は成績が悪くて戦争反対ですから、南へ南へだんだん流されました。満州の經理学校を卒業したんですけど、最後に一番遠いところまで引っ張っていかれて、東ティモールへ。僕はそれでよかったと思います。ゴーギャンが南の島、タヒチに行ったかな。あれほど

僕は文学的じゃないけど、東ティモールというのは、戦争から離れられるなという感じはしました。あそこへ行くと時間がゆっくり流れているなという感じがしました。時計が止まっているんじゃないかというぐらいです。シンガポールからジャワ、ジャカルタ、スラバヤ、そしてティモールへと行ったんですが、スラバヤへ行ったときに、先輩の主計官に「君、あそこは地の果てだよ」「今のうちに、遊んでおけ」と言われて、その先輩が、前借りしてくれて遊んだ。遊んだといっても1週間ぐらいぶらぶらして、それでティモールへ行ったんですが、地の果てどころか、僕にとってはすばらしいところでした。

ちょうど僕が行ったときは、最初の上陸作戦が終わった後でしたから、もう戦争はなかった。ただ空爆だけは、オーストラリアから飛行機で1時間かからないから、毎日朝の散歩に来るんです。こっちは高射砲がない。自由自在に走り回っている。そんな時代でしたけど、それでも空爆を除けば、地上では戦争がなかったわけですから、僕にとっては本当にすばらしい。

人間というのは、原始に近いほど人間が純朴なのでしょうかね。子供なんか目をくりくりさせて、本当にかわいい子供がたくさんいました。そういうところだった。

小スンダ列島の一番東にティモール島というのがああるんです。その東半分が東ティモールで、西が西ティモール。片方がオランダ領で、片方がポルトガル領です。それで1945年に戦争が終わって、それからすぐインドネシアの独立。僕らは戦後、スカルノに会っている。どこかの洞穴の中で会って、独立戦争に参加してくれないかとか言われたことを覚えています。それをやって、スカルノによって旧オランダ領は全部インドネシアになる。

そのときに、当時のインドネシアの外相が、「東ティモールは別の国だ。あれは、ポルトガル領であって、われわれとは関係がない。別の国だ」というふうにはっきり言っているんです。それも証言がたくさんあるんです。それなのに、どういうわけか分からないけど、侵略してしまったわけです。それで、ずっとポルトガル領できていまして、4百何十年と続いて、それから、日本が3年間占領していたんです。占領する必要は何もなかったんです。僕は平気で参謀長とか師団長に、なぜこんな所を占領しているんだ、何の戦略的意味もない、という話をよくしたんです。

その後、1975年にポルトガルの政変が起きました。それまで、サラザールという独

裁政権が続いていたんですが、それが倒れて、社会民主主義の政権が誕生しました。そして、すべての植民地を解放すると宣言した。それで、アフリカのモザンビークだとか、アンゴラとか、ギニアとか、みんな独立するんです。東ティモールでもすぐ独立しようという運動が起きるわけです。独立運動が起きるときに、その中で、もちろん必ず幾つかの政党ができるわけですが、フレティリンという、日本語に訳すと「独立革命戦線」というんですが、それが庶民の代表として台頭してきたわけです。それがあって、そのほか UDT とか、アボディティとかがあるんです。

UDT は、政府の高官、政府からいろいろ仕事をもらっている人たちの団体です。そういうのがあったんですが、ほんの 3 週間ぐらいでフレティリンというのが支配をしてしまうわけです。それで、フレティリンが支配したときに、インドネシアの方が、これは大変だということで、いろいろ宣伝するわけです。フレティリンというのは共産主義だとか宣伝したんです。フレティリンの人に聞いてみたら、 Kommunismus という言葉すら知りませんと言っているぐらいで、何も関係ないんだが、日本語に訳すと「独立革命戦線」だから、いかにも左翼のように聞こえますよね。

ただ、ベトナムだって、別に共産主義でも何でもないんだけど、独立しようという運動があって、それに対してアメリカは爆撃するわけです。世の中ってそんなものだと思いますが、これは危ないということで、インドネシア軍は、西ティモールはインドネシアになっていますから、UDT をそそのかして混乱を起こさせるわけです。それで内戦になる。そのときには NHK のカメラマンなどが行って、ちゃんと映像になっていますから、だれでも証明できるんです。どういうふうになっているか、全部分かります。それから、そのころは朝日新聞とか、共同通信とかの記者も行っていて、書いています。朝日新聞は、そのとき社説まで載せましたね。日本はもっと人道外交をやれと、そんなことを書いていました。

結局、75 年 12 月 7 日にインドネシア軍が侵略するわけです。何の意味もないですよ。ただ東ティモールの方からそういう要請があったと。大体そうですよ。要請があったということで入るんです。ちょうどチェコをロシアが占領するのと同じです。要請も何もしないんだけど、要請があったといって侵略する。みんなそうです。僕は、そのときロシア大使館へ行ったんですが、僕は、そのとき社会党にいて、書記長が石橋氏。「行こう」と言ったら、政治家はすぐ「情勢をよくみて」と言うんだから。「侵略に決まって

いるじゃないか」と言って、僕一人で行ったんです。世界の侵略というのは、みんな何か理屈つけて、要請があったから入ったとか、そういう侵略の仕方をしているんです。

この東ティモールの場合も、東ティモールの一部の勢力から要請があったというので、インドネシアが入ってきた。しかも、12月7日に侵略したんですが、12月5日にアメリカのフォード大統領がジャカルタへ行くんです。

結局、簡単に言えば、ゴーサインを出したわけです。ゴーサインを出して、12月7日に侵略した。オーストラリアはそのことを知っていて、情報は入っていて、12月5日の夜に電報を打っているんです。電報で東ティモールにはかなりのオーストラリアの人がいましたから、危ないから全部引き上げろという勧告を出して、かなりの人は引き上げたんです。案の定12月7日侵略する。これが侵略の最初です。

侵略して、それも義勇軍と称している。大体みんなそうなんです。侵略というのは、初めは義勇軍。しかし、実体は完全なる完備された軍隊です。国軍が入ってきているんです。義勇軍なら戦車を持ったり、ヘリコプターを持ったりなんかしません。こんなことで、最初の1日で2000人が殺されたというんです。それが75年の12月です。

75年の12月というのは、まだ国連が開いていまして、国連ですぐ決議をかけるんです。決議が上がって「インドネシア軍は直ちに撤退しろ」と、「東ティモールの自決を認める」という国連決議が出ました。

日本政府は、その時、独立に反対する方へ入っているわけです。僕は「日本政府というのは何だ」と、いつも思っています。日本はインドネシアとの関係がものすごく深いでしょう。経済的な利害関係がすごく深いですね。日本のインドネシアに対するODAは、世界各国のインドネシアに対する対外援助を合計したよりも多い。大体、3000億円ぐらいです。しかし、対外援助というが、あれは対内援助ですね。日本の企業のプラントにお金をつけるんですから。あれは対外援助でなく、対内援助だと僕は思います。また、日本は、石油とか天然ガスをインドネシアから輸入しています。そうした経済関係があるために、日本は国連の決議に反対するんです。75年から1982年までずっと決議があるんですが、日本はずっと反対している。反対するだけでなく、日本はものすごいオルグ活動もやっている。

オルグ活動というのは、日本はあちこちアジア各国とかに援助しているでしょう。そういうところに全部オルグしちゃって、賛成の数は変わりませんが、反対票がだんだん

増えてくるんです。82年度になると、賛成が50何票で、反対が45、6票になるんです。

そのころから、国連はデクレアルのときに、これ以上続けると分からなくなるというので、決議案はポルトガル政府が出しているんです。ポルトガル政府もその決議案をやめようといって、やめる。といって、インドネシアだって、勝つ自信はないから、あれは自分の国だとは言えないわけです。結局、国連事務総長が仲介に立って、インドネシアとポルトガルの両政府の代表との間で話し合いをして、物事を決めていこうということになったんです。それが今までずっと続いていたんです。

僕は、その話し合いの中に現地の東ティモールの代表を入れていなかったということが、一番の問題だと思います。東ティモールの人々にとってみれば、何よりも独立を望んでいたわけです。「死か祖国か」というテイトン語の言い回しがあるんですが、ものすごく独立を望んでいましたから、ずっと運動が続いていて、今回のことになったわけです。

途中いろいろあるんですが、その中で一番大きいのは、皆さんも覚えていると思いますが、91年のサンタクルーズの大事件です。サンタクルーズというのは、サンタクルーズ墓地というのがありますが、日本は、死後一週間後だけど、向こうは2週間目にみんなでお参りするんです。それが、デリーの教会に集まっていた人を青年が、軍隊が教会に入って、連れ出して殺しちゃったんです。それで、デリーの民衆は怒って、サンタクルーズのお墓にもものすごい数の人が集まって、墓地に行くんです。それに向かってインドネシアの軍隊が発砲した。何人殺したか、大体200人か、全然分からない。それがサンタクルーズ事件で、大きな問題になりました。

それから、1975年に侵略して、76年、77年、78年という3年間で、大掃討作戦というのをやるんです。そのときに殺された人間が大体20万人と言われている。これは、あるアメリカの情報センターの発表によれば、戦後で殺された人間の数でいえば、ポルポト政権によるカンボジアが一番。あれは150万人ぐらい殺しています。ただ、殺戮率で言ったら東ティモールが一番多い。3分の1。60万の人口のうち20万人、つまり3人に1人は殺している。すべての家族で殺されていない家族はほとんどいないと言われたぐらいです。そのぐらいすごいことがずっと続いてきて、ここまでできてしまいました。

今度の独立運動は1999年です。その間に今度釈放されましたけど、シャナナ・グスマオーという、ずっとフレティリンの一番親分です。それが逮捕されて、牢屋に入れら

れたり、いろんなことがあったんですが、僕は、そのときにペロ司教とか、ラモスホルターという人を日本に2回くらい僕は呼んでいるので、来ていますけど、ノーベル平和賞にずいぶん推薦してきた人。そうしたら、1996年かな、2、3年前に、ノーベル平和賞を2人がもらいました。もらってからも一度呼んだんですけど、ノーベル平和賞ももらった人にさえ、日本政府は全然会おうとしないんです。日本の政府というのは恐るべきですね。日本の政治に関係している人がいるかもしれないから、悪いですが。それはひどかったです。

僕は、APECのときにいつも官邸に行って、必ず総理大臣に、ちゃんと東ティモールのことを発言しろって言うんだけど、ほとんど発言した人はいなくて、宮沢さんだけですかね。あのときは、今度、外務大臣になった河野洋平さんが官房長官で、あの人はちょっと仲がよかったものだから、「やれ」って言ったら「やります」というので、彼が初めて、一言だけ、「日本は東ティモール問題に対して、大変注目しています」と、それを一言言っただけです。日本政府がやったことは、それだけなんです。

また、インドネシア大使で発言したのは、これも一人。小和田恒さん。外務省であつちこちの大使になっているでしょう。小和田さんがインドネシア大使になったときに、初めて1回だけ言っています。「東ティモール問題を、われわれは非常に注目していますよ」ということを言っているんです。注目というか、警告しているんです。

後は全部だめ。僕が行くと、外務省の南東アジア第二課というのかな、そこへ行くと、びっくりします。あそこの局長のところには大きな地図があります。見たら、東ティモールと西ティモールの間に境界線がないんです。これは何だと言って、国会で竹村参議院議員に質問させたんです。そうしたら、あわててまだらな線を引っ張っていたわけです。境界線がないんですよ。むちゃくちゃです。

国連の決議で、あれはインドネシア領でないというふうに、きちっと決議されているのに、境界線も何にもなくて、インドネシア領になっている。ちょっと僕は外務省を疑わざるを得ないです。どうしてあれはインドネシアなんだって、江田五月さんと仲よかったから質問させた。土井たか子さんにも質問趣意書というのを出して、何度か幾つか質問させているんですが、いずれもいい加減です。

外務省は、あれはインドネシアが実効支配しているというんです。実効的、こんなのは国際法上あるのかなと思うんだけど、僕は、国際法を多少は勉強したけど、実効的に

支配しているというんです。ハーグの国際司法裁判所に日本から行っている裁判官がいて、その人に聞いたところ、「そんなことはない。あれは明らかに国際法上でいえばポルトガル領だ」と、彼はそう言っていました。

結局、日本で東ティモールのことを知っている人は、人口の 1000 分の 1 でしょうかね。今までずっとやってみて、1 万人ぐらいしかいなかった。いや、1 万人もいなかった。だから、われわれは知らせ役だった。毎年、スピーキングツアーといって、向こうから人を呼ぶのですが、呼ぶのがまた大変なんです。呼んで、各地で講演会を開いて、みんなに知らせるということをやる。

もう一つは、日本政府に圧力をかけるんですが、これは僕らの責任ですけど、なかなかかからないんです。ただ、国会議員のなかでは、東ティモール問題を考える議員懇談会というのをつくって、多いときは 80 名ぐらいの議員団がいました。しかし、それだけやっても、やはりだめなんです。もっとも国会議員というのは何も考えてないからね。自分の当選だけ考えてるみたいです。本当にそう思います。

余計な話だけど、議員というのは全然逆なんです。本来であれば、まず世界のことを考え、日本のことを考え、それから自分の政党のことを考えて、派閥のことを考えて、最後に自分が当選するかどうかを考える。日本の国会議員は逆でしょう。まず、当選することを考える。それから、自分の党、派閥のこと、それからせいぜい日本の社会のことを考える。本当は考えてないけどね。それも全然下の方、自分の当選と関係することしか考えていない。それから、後は世界のことを考えるというぐらいです。

そうだから、僕は、本当に東ティモール問題をやっていてびっくりするのは、初めは決議案の賛成が 70 票ぐらいあったのです。どちらかというと、割合小さい太平洋の島々の国とか、たくさんあるんです。一番すごいのはバヌアツ島というのがあって、人口 10 万ぐらいの島で、そこの大統領が来たときに僕は会ったんですが、バヌアツは割合東ティモールに近いので、そこに何か塔を建てて、そこからラジオ放送を流すようなことを考える。いろいろやったら 1 千万ぐらいかかるというので、1 千万円ぐらい何とかなるだろうとやっているうちに政変が起こって、大統領が失脚してできなかつたんです。

太平洋学会というのがあって、そこでしゃべったときに、東ティモールの人口は 60 万人ですが、僕らがいたときも 60 万人、それからずっと 60 万人というと、結局たくさん殺されているんです。さっき言った殺戮率が世界一でしょう。3 分の 1 殺されて、レ

イブの率が2割、成人女性の2割がレイプされている。悪いことには、先進国で扱っていない避妊薬とか、病気でうっかり入院なんかしたら、すぐ避妊の手術をされちゃうんです。それで、占領をしてからは、できるだけジャワから人を入れたり、ジャワとか、バリとか、人口の交換をする。インドネシアでは、いろんなことをやっているけど、ともかくインドネシア化というのが、占領してからは大命題なんです。言葉もティトン語というのがありますが、もう学校では絶対インドネシア語しか教えない。

それから、一番僕が、戦前東ティモールにいて分かったことは、東ティモールの人というのは、非常に誇りを持っている。われわれは「東は日出ずる国だ。西は日の没する国だ」というふうに言っていた。それとなんか誇りを持っているんです。宗教が全然違うでしょう。ポルトガルというのは、敬謙なカソリックですが、インドネシアはイスラムです。だから、全く国の人柄が違う。アイデンティティーも全く違うし、どうみても、あれは一つにはなれないと思う。言語も違うでしょう。僕の見るところでは、人種も、北の方のニューギニアなんかのパプア族とか、そういうのがかなり入っています。多いです。西の方は、ほとんどジャワ人が多い。だから全然違う。だから、1940年の戦争当時でも全然違う国だと思うくらい、西と東は違うんです。

一番僕がはっとしたのは、東ティモールの人たちは「乾杯」のときに、「モリス、ティモール」と言うんです。「立て、ティモール」って乾杯するんです。日本軍なんていうのは、文化なんか全然考えない軍隊ですから。軍隊はどこでもそうですが。

僕は、一番楽しいのは、年に1度のフェスタ、お祭りがあるんです。これは日本が占領したときからずっと途絶えていたんです。僕は、すぐフェスタを再開しようと、フェスタを再開させたんです。

そうしたら喜ばれて、3日3晩踊るんです。大体、太陽が没すると踊り始めるのですが、南の国ですから、雨期と乾期が完全に分かれていまして、南十字星が出るでしょう。椰子の木の下で踊るわけですから、それはすばらしいですよ。3日3晩ですから、朝になったら寝ちゃう。寝転がって、寝るんです。また、夕方になると起き出して、踊り出すんです。それを3日3晩やっていました。そのフェスタをやって、そのときに一番みんなに喜ばれましたね。もちろん僕らは軍服を脱いでやったんですけどね。なんかやはり友達という関係になったという感じがしました。

だから、テーマは人間だと思います。言葉が通じたか分からないけど、あそこはティ

トン語というのは、語数が少ないんです。全部で 500 語はいかないです。全部覚えたって大したことはないです。数字が 5 までしかない。何で 5 までしかないんだって言うと、指が 5 本しかないから 5 でいいんだと言う。並んでくれと言うと、必ず 5 までしか並ばない。5 でずっと並んでいる。そういうことでした。すばらしい所です。

それが今やっと独立した。世界で初めて、この住民投票というのは、大分前から、7、8 年前から、ペロ司教が国連に住民投票をやれっていうことを提案しているんです。僕は、住民投票をやったら恐らく 9 割はいくんじゃないかと思っていたら、8 割でした。あれだけの妨害があって、8 割でしょう。

あれだけの妨害というのは皆さん知っているように、1 万 5000 人の軍隊がいて、それが民兵にみんな銃を渡したりなんかして、そそのかしてやっているわけです。それは、毎日新聞に載っていたから分かると思いますがね。それでも 8 割いったんです。だから、ああいうのがなければ 95% いったと思うんです。

もちろん、非常に困るのは、西サワラというところが、独立していないんですが、ここでもそうなんです。あそこは PKO、PKF まで入っている。ところがなかなか決まらない。なぜ決まらないかという、何月何日生まれからの人を選挙権があるようにするかということが、非常に難しいです。東ティモールでいえば、インドネシアから侵略してきた 75 年の 12 月ですか。その前からいた人は東ティモール人で選挙権があるというふうにするんです。ただ、それがいろんな理屈をつけて、東ティモールのお父さんがいればいいとか、東ティモール人と結婚をしていれば選挙権があるとか何とか、いろんな理屈をつけて、なかなかその辺が難しかったんです。

結局は、何だかんだ言っても、それと今までインドネシア軍が約 20 年ぐらい占領している間に、いろんな利益を被った人たちがいますよね。その連中がどうしてもインドネシア併合の方へ行くんです。普通の人はみんな独立。450 年も祖国を持たないんですから、祖国を持ちたいというんだらうと思うんです。だから、それで 80% 近くが独立支持でしょう。これ以上のことはないと思うんですが、でもまだ民兵がごたごたしているらしいけどね。きのうかなんか国連で決めたようですね。今、多国籍軍ですが、そのうちに PKO になると思うんです。僕は東ティモール問題をずっとやっていて、人間の尊厳みたいのが問題だなと、つくづく感じています。

ちょうど、第二次大戦の始まるちょっと前に、スペイン戦争というのがありますよね。

僕は、あの戦争が好き。好きっていうのはおかしいな。「カタロニア賛歌」か。オーエルが書いたのは。オーエルとかジードとか作家とか、文学者とか、みんな個人で参加するんですね。ファッショ政権に対して個人で参加して戦争するスペイン戦争。そのとき、「人間の尊厳のために」っていうスローガンで戦争するんです。だから、東ティモールも、やはり「人間の尊厳」ということを考えますね。

だから、日本もこれからもうちょっと、道義とか、正義。もっとも正義といたって、ニーチェが言っているように、「正義というのは、千幾つある」とかいう。民族のある数だけ正義があるということもありますが、それでもやはり、人道外交。

だれだったかな。アメリカの大統領、1人だけ言いましたよね。そういうものをもっとやるべきじゃないかと思う。これ以上の物質的な豊かさは、もうこれからは要らないんじゃないか。そう思いませんか。僕はそう思うんだけど、テーマはこれから「人間」だと思います。21世紀というのは、人間。ただ、僕はどうも昔からバッチつけるのが嫌いなものだから、絶対やらないんですが、市民運動ばかりやっています。

アメリカの学者で、「断絶の時代」を書いたドラッカーのポスト資本主義。ポスト資本主義に「峠を越えると、景色が変わる」という有名な言葉があるんですが、彼が書いているのは、アメリカで2015年ぐらいだから、国家の権力と市民の権力がだんだんイコールに近くなってくるのは、大体そのぐらいまでだろうということを言っているのですが、僕は日本はもっとかかるような気がしますね。国家の権力の方が強すぎる。だから、政治に関係しているから、今の政治は嫌で嫌でしょうがない。

また、これは話が別になるけど、早く、せめて分権すればいいんです。何も日本の首都移転はいらないんです。首都移転ではなくて、権力を分散すればいい。何でもないんですよ。そうすれば、東京へ集まらないですよ。だから、大阪の住友の本社がなぜ東京にあるか。おかしいでしょう。みんな陳情とか、請願とか国家権力に近くないと仕事にならないからです。これは全部分権してしまえばいい。

西ドイツのボンなんか小さなところでしょう。今度はベルリンに移るわけです。ボンは人口20万人ぐらい。アメリカだって、ワシントンだって小さいですよ。それで済むんです。それを早くやらないと。だから、鳥も一極集中って言って、みんな東京に集まってくるんです。東京が一番食べ物が多いから、鳥も一極集中。これも早くやめないと、日本はなかなかよくなるという感じがしています。大体こんなところですよ。

3. 質疑応答

司会 貴島さん、どうもありがとうございます。それでは、質疑応答に移らせていただきたいと思います。皆様いろいろ御質問等おありかと思しますので、ぜひ積極的にご発言ください。では、どうぞ。

A 今、しゃべられたことと反対のことを聞いてみたいんです。日本が占領したときに、戦略的に意味がないというふうに感じておられるとおっしゃったんですが、そういう所をインドネシアが占領して、何の得があったのか。二つ伺いたいんですが、日本にとって侵略しても意味がない所を占領して、インドネシアは何のメリット、何の得を目指したのかというのが、一つです。

もう一つは、東ティモールからみまして、天然ガスがあるらしいですが、子供でも、独立したいかっていって投票させたら、たぶん独立したいと思うんですが、経済的に食えない状態で独立したい、したいというのは、文化面とか、人の尊厳とか、そういうことを別にしたら、どの程度考えて独立したいといっているのかという二つなんですけど。

貴島 日本が侵略したときに意味がないというのは、参謀長とか、師団長、僕はあまり階級というのは考えない。僕は当時少尉ですが、時々問題を起こすが、相手も僕のことをよく知っていて、「うんうん」と言って、碁を教えたりなんかしているから、そういうふうになっちゃうんだけど、そのときにどうして、こんな所を侵略するんだと言うと、これからオーストラリアを占領して、南米に行って、それから北米、アメリカへ行くんだ。ばかなことを言うな。だって、日本は当時飛行機に対する高射砲もないんですよ。それでなんでオーストラリアまで行って、アメリカにも行けるんだって言ったら、にやにやしていましたけどね。だからあそこは全然意味がないです。意味がないのに侵略した。ついでですよ。

あのときは、ついでに侵略したっていう程度です。もちろんいろいろあるんです。僕は多少マルクスなんて聞きかじったものですから、ロシアが今、アフガニスタンとかキルギスとかやっているでしょう。全部占領していきますよね。あれもレーニンの帝国主義と違うんです。経済的利益よりも、よく分からない。僕は地続き帝国主義といって、文章を出したことがあるんですが、地が続いているから占領するぐらいの意味しかなかったんです。

インドネシアの場合は、東ティモールが独立するというのは、かなり意味があって、彼らは共産主義だって宣言していた。僕は、戦後すぐインドネシアの小学校の読本とか読みましたら、共産主義の国だって書いてありました。それと、600年前から一つの国であったとか、いろんなことが書いてありました。ただ、共産主義を非常に宣伝していました。

しかも、あそこは、それよりもっと大きいのは、そういう宣伝だけではなくて、インドネシアはいろんな所を占領しているでしょう。島がたくさん、300ぐらい島がある。今、問題になっているアチェとか、イリアンジェアとかいうのは、今でも独立運動があるんです。特にアチェが非常に問題になっている。飛び火してしまう。

東ティモールの独立がそっちにも飛び火するという、そういう恐れがあったんです。それで独立させなかった。それが一番大きかったかと思います。ただアメリカなんか、別に何にも関係がない。どうしてアメリカがインドネシアの味方をしたのか、よく分からない。ただ、あそこが船の通る航路になることはなるんです。大した意味はない。ほかを通ったっていいんだから。それもあまり意味がないと思うんです。

それから、初め社会主義圏は割と東ティモール独立に賛成があったんだけど、非常に薄い賛成です。あまり熱心な賛成ではなかった。中国やソ連やあの辺は、非常に薄い賛成だった。やはり途中から EU が非常に濃い賛成になってくるんです。だんだん違ってくる。それから ASEAN は逆に全部インドネシア寄りです。それから、日本が援助しているところはインドネシア寄りというふうになっていくんです。不思議なものですね、世の中は。

どうぞ御質問ください。僕は何も考えないで来たものですから、申しわけなかったですね。

B もう一つの質問。食っていけるか、やっていけるか。

貴島 ああ、やっていけるか。それと東ティモール海の石油の問題ね。これは、僕らが戦争で行っているときも、南のオスとかビケケというところへ行くと、現地の人が黒い水が出ると言っていたぐらいですから、かなり出ることは間違いない。それで、7、8年前にオーストラリアとインドネシアが提携して、日本石油も入りますが、東ティモール海というところの石油を掘ることを契約するんです。それで、かなり出るということは分かっているんです。その契約がおかしいんじゃないかというので、僕は国際司法裁

判所にポルトガル政府を通じて訴えさせて、国際司法裁判所の副裁判長の小田誠に話をしたんです。そしたら、そのとおりだ。全然間違いだ。そういうことは許されない。東ティモールの海である。東ティモールの大陸棚なんです。オーストラリア領ではないんです。東ティモール寄り。かなりの量が出るんです。それが確かに資源として大きいんです。

僕は、そういう資源じゃなくて、僕らが行っていたときから、60万の人口が全員が食べていたわけですから、そんなにぜいたくしなければ、山へ行けばバナナもあるし、パイナップルもあるし、何でもあるんです。海はきれいな海で、沖縄の海よりもはるかにきれいな、手を入れると染まるんじゃないかというぐらい、きれいな海でした。ただ、向こうでは、魚をとるのに日本みたいに変なことはやらないですよ。潜って行って、弓で打つんです。そんなとり方をしていました。日本軍がやっているのは、爆破だからやめろっていったんです。手りゅう弾を投げて、あんなことをしたらかわいそうだと思います。だから、食うのにはそんなに心配ない。

確かに、地の果ての国で、特に平野が少ないんです。いわゆる地勢学的に言うと、サバンナっていうかな。平野が少なく疎林なんです。サボテンはものすごく多いんですが、山の方は全然違います。山へ行くと何でもあります。ただ、あそこは雨期と乾期がはっきりしてしまっていて、雨期になると、山と海は近いから、橋なんか造ってもすぐ流れちゃうところです。何とかしてダムを造れば大丈夫じゃないかなと思います。水田はありましたけどね。山は、みんな焼畑農業で、焼畑でトウモロコシをぼんぼん投げていた。一番の主食はトウモロコシです。水田もあったんです。水田だけはちょっと僕もやりました。日本の軍隊なんていうのは、みんな参謀部へ行って、名簿を出せて言ったら、みんな何出身って書いてあるでしょう。その中から大工さんはちゃんと家を造るために雇えばいいわけだから、農業出身者ならお百姓さんと一緒に農業をやらせばいいということでやったら、みんな感心していたけど。水田をつくらせて、一尺ごとに植えるだけで、収量が倍になるわけです。大したことはない。向こうはばらまきですから。水牛を水田の中を走らせるんです。それが掘り起こしたことになって、ばらまきするだけ。そうではなくて、一尺おきに種を植えなさい。そうしたら、収量が倍になったと喜んでいただけね。だからまだまだやりようによっては、幾らでもできる。

それとコーヒーができるんです。コーヒーはデリーコーヒーというのは、昔、世界一

おいしいって言われたんです。それがよく分かったんですけど、今ちょうど西ティモールとの境目に近いエルメナの上の方ですから、かなり荒らされていると思います。ちょうどコーヒーというのは、大きな木の下木として生えるコーヒーが一番いいんです。しかも、斜面がいいんです。水の流れがいいようなところ。本当に適地なんです。コーヒー豆も一番いい。昔、世界一って言われていたんです。

日本も戦前は行ってたんです。日ポ合弁会社という日本とポルトガルの合弁会社があって、それから、海の方に魚が捕れるから、南洋興発という会社も行ってたぐらいですから。みんな、いまは食べるよりもまず独立したいです。祖国を持ちたいと思っちゃうだろうと思います。それからですよ。3、4年はかかる。みんな文盲が多いですから、学校はあまり勉強させていないから。そこから始めないといけないけど、文盲といっても中国なんか奥地に入ったら、もっとすごいからね。僕はそれは心配していません。

C 国際通貨基金のCと申します。

われわれは、国連の末端機関として、今から独立までのトランジションの仕事をお手伝いせよと言われておまして、現にわれわれの仲間も10人ばかり行っておりますし、東京からも一人行きて、まさに今仕事が始まる。そういう意味で、われわれもあまり知らないで、きょうここで勉強させていただこうと思って来たわけでございます。

今、先生のお話を聞きまして、ティモールの方は、まずポルトガルから独立したい。インドネシアの一部ではなくて、インドネシアとしての一体感を持ってない。だから、自分たちの国を持ちたいという気持ちであるというお話を聞いた。さらに、そういうのを認めるのが人間の尊厳を認めることであり、そういう流れだ。そこで私はお話を聞きながら一生懸命考えておりました。ティモールのような所は、世界に方々あるんでございますね。

今、インドネシア国内でもおっしゃいましたアチェもございますし、イリアンジャもございます。それから中国でもチベットがございますし、南太平洋ではパプアニューギニアのブーゲンビルは独立運動をやっていますし、そういうところで、一つの考えによれば、そういうところは住民投票をやって、その住民投票の総意があればどんどん独立をしていく、それを国際社会も認め、助けていくという考えがあると思うんですが、東ティモールは、そういうところとは違うというふうにお考えですか。あるいは、他の地方のそういう独立運動をどういうふうにお考えになりますか。

貴島 ほかの国と違うのは、インドネシアがきてから殺戮率、強姦、暴乱がものすごい。それはほかの国はないですよ。もちろんポルトガルの植民地時代というのもそんなにいい政治をやったわけではないんです。人頭税を取って、モノカルチャーですから、コーヒーと香辛料です。有名なジャクダンがとれる。そういうモノカルチャーですから、だけど、ポルトガル時代には、あまり殺すとか、そういうのはなかったんです。インドネシアが入ってきてからは殺しがすごいですから、それが全然違うんじゃないですかね。ほかの国の、今お挙げになった国にはそういうのはないでしょう。そこだけ違う。

だから、東ティモールに関して、僕はどうしてもインドネシアのやっていることは許せない。それから、日本はぜひ援助してください。国際通貨基金でも何でもいいから。僕はインドネシアに出しているうちのほんの 1%か 2%でも東ティモールに回せば、ずいぶん違うと思います。僕らの計算では、ちょうど日本が援助している額の半分ぐらいが、インドネシアが東ティモールに送っている軍隊とか何とかに使っている費用になるんじゃないかなと考えるくらいでした。

僕なんか、国際会議にたまに出席すると、一番恥ずかしい思いをするのは、「あの日本が」ってすぐ言われる。「あの日本がなぜ東ティモールの独立に反対するんだ」と、絶対に言われる。あれだけインドネシアに援助しているんですから、世界中合わせても日本にかなわないぐらい援助しているんですから、その国が発言すれば、独立なんかすぐじゃないかと、世界の市民運動家たちはみんなそう思っていますよ。

D 一つお聞きしたいのは、ちょうど今、国連の方では、暫定統治機構の立ち上げというのが決議で決まりました。これからわれわれもそこへ人を出して、まずおっしゃった、日本から東ティモールへの援助なんかも、これからやっていかないといけないと思っているんですが、その中で、ずっと人を送るということで、東ティモールの中での対日感情というのは、どうでしょうか。

貴島 少なくとも僕の周辺だけじゃないと思いますが、ティモール人はかなり日本に対しては好感を持っている。一つは、錯覚を起こしているんじゃないかと言ったのは、恐らく日本が、東ティモールを独立させてくれるんじゃないかという感じがあったこともあるんですが、日本人としてはものすごくよかったですよ。僕は、友達。

D 今でもそうですか。

貴島 今でもそうだと思います。今でも僕らの仲間は全部、この間、8月30日の投

票なんかでも全部行っていますが、今でもいいそうです。

D われわれが心配しているのは、日本人が行ったときに、対日感情みたいのが強いでしょう。危ない目に遭う。

貴島 全然ないです。

D でも、シャーレン・コスナーは、少し日本に対して、かなり批判的な発言をしたりするときがあるんですね。特に今の日本に対してではなくて、どちらかというと過去の。第二次世界大戦のときのことを、いろいろ引用したりしながら、そういう批判的な発言をしたりするときもありますが、そういう感じはあまりないですか。

貴島 彼は、戦争が大嫌いだし、みんな仲良く生きていこうという方ですから、大丈夫だと思いますよ。あしたかあさって、江田五月さんなんかが行くんですけど、今度はグスマンに会おうとか言っていましたけどね。

司会 ほかに御質問があれば。

E 住民投票でかなり最終的にはたくさんの人たちが、死にましたよね。住民投票直後もかなり多数の、確定数は出ていないと思うんですが、一般住民の方が死んだんですが、このやり方について、もともと住民投票のやり方がまずかったというような批判的な意見や、時期尚早だったんじゃないかといったような意見もあります。その辺の事態を受けて独立は実現したんですが、かなりの流血があったということで、その点をどう評価されているのかということ。

それから、今は東と西で分かれていますけど、もともとオランダ領とポルトガル領という違った意味もあるんですが、それぞれ東ティモールの住民と西ティモールの住民の間の感情的なものですか、その辺はどうなんでしょうか。

貴島 僕は、後の方から言うと、長くつき合っていけば、恐らく一つになれると思っています。僕は、軍隊でティモールにいた時、アタンプアという一番東に近い西の大きな町があるんですが、その連中と、こっちの東ティモールの独立運動をやっている間を取りもとうというので、運動したことがあるんです。それほど違和感がないです。ただ、イスラムとカソリックはかなり違いますから、これをどうするか。ただ、インドネシアの中でもカソリックはかなり入っているんですから、僕は、少し時間をかければできると思います。

それから、先の方は、何だったかな。

E 住民投票。

貴島 住民投票の是非ね。それは、歴史が判断するんでしょうけど、いつかはやらないとできないし、かなり 7、8 年前から、ペロ司教が住民投票で決めろということを出しています。ただ、やっぱり放っておいたらもっと悪くなるかもしれません。軍隊を撤兵すればいいんですが、1 万 5000 のインドネシア軍隊がいて、それが全部銃を渡すわけでしょう。民兵といたって、自分たちの組織と同じですから。それが暴れさせているわけでしょう。そんなのほっといたらますます悪くなって、独立できない。インドネシア領になってしまうのではないのでしょうか。

そうしたらもっと悲惨なことが起きるかもしれませんよ。山の中には、フレティリンという独立派の方のゲリラがたくさん、まだまだじっと待っているんですから。その連中が今度は動き出しますよ。今はシヤナナグスマンはと言われたけど、ちゃんとフレティリンに対して、今は絶対に暴力に出るなということを行っているんですよ。それぐらい静かにしてやっていますから、これはしょうがないでしょうね。

歴史が判断することですが、僕は、住民投票は早ければ早い方がいいと思っていますけどね。もっと早ければもっとよかったかもしれません。

D 先ほどちょっと申し上げたんですが、国連のこれから暫定統治機構が入っていつて、これからまさに、日本なんかも含めて、東ティモールへの援助が始まるんですが、われわれが常に悩むところは、どこまでやるか、どこかのだれかが、東ティモールがいいバトンタッチをして、東ティモールが自分で自立していくということは、国連がどこまでをやって引き継ぐか。それから援助もどこまでやるべきか。

私もたまたま、ちょっと先週コソボへ行ってまいりまして、コソボでもちょうど国連の機構があつて、現場も見てきて、あるところでは国連からもっと援助がきて、家を直してほしい、何を直してほしいというのが強いと同時に、被害の少なかったところは、どちらかという、もう自立できるんだから、国連がそれ以上あまり関与しないで、適当なところで終わってくれと。両方がすごくミックスしている現状を見てきたわけです。

そういう観点から、今の東ティモールの中で、いろんな集会が行われているところの様子やなんかを情報としてとっているんですが、その中で、東ティモールの人たちの中で、国連が既製服をつくって、その既製服をばんと渡されるような、そういう形のはごめん被るという声も、東ティモールの中であるみたいなんです。今の東ティモールとい

うのは、ほっといて自分でやりなさいというのは、あまりにもいろんなものが壊れちゃうし、いろんな経済レベルからみると、あまりにも低い。かなり手厚く援助とか、いろんなことを毎日やっていかないと、いけないんじゃないかと思う。両方と、東ティモールなんかの反応を見ていると、そこら辺の距離感というか、どこまでやっていいかです。

貴島 3、4年かけて援助して、どういう文化をつくるかですよ。東ティモールは東ティモールの文化がありますから。それぞれのアイデンティティーがあったような、都市のつくり方とか。

僕ら軍隊で行ったときには、家をつくるのは簡単で、1日でできるんです。床は竹なんです。竹を切ってきて、屋根は椰子の葉っぱ。それで終わりですから。乾期は全然雨は降らないから、開けておけばいい。壁がいらぬ。そんな生活をずっとやってきたんだから、もちろん、そのときもデリーの都市はポルトガルふうの建物でしたね。やっぱり赤れんがでやってましたから。

D 今も、ポルトガル的な文化に、非常に強いんですか。

貴島 あるかもしれません。リスボンふうの。僕はリスボンも2回行ったんですが、割に落ち着いていますよね。「哲学する町だ」と言って、喜ばれたことがあったけど。割合落ち着いているからいいんじゃないかなという感じがします。テイトン語の中にポルトガル語も大分入っているんです。だからやはりいろいろやってみるしか仕方がないでしょうね。意見を聞いてやりながら、やった方がいいような気がしますね。コソボあたりとは全然違いますよ。文化の程度が全く違うからね。

司会 ほかに御質問ありますでしょうか。それでは、セミナーの方はこれで終了させていただきます。この後別室にてコーヒーの御用意をさせていただいておりますので、お時間のある方は是非そちらの方にも御参加いただければと思います。本日は、ありがとうございました。

貴島 どうもありがとうございました。（拍手）

[文責事務局]

東京財団 研究事業部

〒105-0003 東京都港区西新橋1-2-9 日比谷セントラルビル 10F

【Tel】 03-3502-9438 【Fax】 03-3502-9439

【URL】 <http://www.tkfd.or.jp>